

## 4 富山湾の海洋深層水で つくり育てるさかな

日本海の容積の約85パーセント、富山湾の約半分を占める巨大な冷水塊「日本海固有水」。富山県をはじめ、日本海側ではこれを深層水と呼ぶが、その挙動も正体もまだよくわかっていない。日本海の300メートル以深に存在し、未知なるがゆえに、遠い存在でしかなかった深層水の利用開発が、今、富山県で行われている。

県が深層水と本格的に関わり出したのは、1989年8月で、氷見市沖に洋上設置型の深層水利用装置「豊洋(ほうよう)」を係留し、水深300メートルの深層水を汲み上げ、海面に散布する海域肥沃化創出実験、低水温を利用した温度差発電実験が同時に行われた。この実験は科学技術庁のプロジェクト研究「海洋深層資源の有効利用技術の開発に関する研究」の1課題であったが、県はこれを契機に、深層水の諸特性に注目して幅広い利活用の可能性を探り、まず、実用化の可能性が高い水産分野での利用を目指した。1995年3月、富山県と(社)マリノフォーラム21により、県水産試験場(滑川市)の構内に深層水利用研究施設が整備された。陸上施設による事業規模での深層水利用は、我が国では高知県に次いで2番目、日本海側では最初である。

深層水利用研究施設の整備により、冷水性生物や深海生物の生態研究、事業規模での種苗生産や飼育試験が可能になった。当面は、サクラマス(親魚(しんぎょ)養成とトヤマエビの種苗量産に全力を注いでいる。サクラマスはサケと同様の母川(ぼせん)回帰性があり、トヤマエビも定着性が高いため、放流効果への期待も大きい。このほか、富山湾で資源が激減しているマダラ、ハタハタ、ベニズワイ、資源状態や生態がよくわかっていないソバイ類などについても、深層水を利用した飼育試験が行われている。富山湾の岸深い地形を活(い)かした深層水利用は、今後、水産分野に大きく貢献するだけでなく、各産業分野で幅広い利用開発が進められるものと確信している。(奈倉)